

ドーピングとツール・ド・フランスの歴史

History of Doping and Tour de France

1K04A233

宮原 哲弥

指導教員

主査 太田章先生

副査 村岡功先生

1章・はじめに。

「ドーピング問題」は、今、現在、世界中でアンチドーピング運動が行われており、「世界アンチ・ドーピング機関」(WADA; World Anti-Doping Agency)の動きも活発になっている。しかしながら、ドーピング検査が年々厳しくなっていく中で、更に、新薬が開発され続けている。自転車競技では、世界一の規模のツール・ド・フランスからも、ドーピング違反が数多く報告されている。私は、自転車部に所属し多くの大会に参加しており、自転車関係者としての身近な問題としてドーピング問題を考えてみたい。

2章・ドーピングの歴史。

「ドーピング」の原語は「ドープ(dope)」からで、語源はアフリカ東南部の原住民カフィール族が祭礼や戦いの際に飲む強いお酒(dop)のことだ。これが後に「麻薬」という意味で用いられるようになった。通常麻薬というと「Doping」ではなく、通常「Drug abuse」と呼ぶ。スポーツ競技における不正な薬物使用を特に「Doping」と呼んで区別するようになった。最初のドーピングによる死亡例は自転車レースで、その他にも多くの死亡例があることから「自転車競技」と「ドーピング」には、かなり昔から関係性がある。

3章・主に使われたドーピング。

筋肉増強に影響があるドーピング薬物では、テストステロン(Testosterone)などが有名である。精神安定剤(向精神薬のうち、精神状態を安定させる性質を持つ薬物の総称。トランキライザーと呼

ばれるもの)や気管支拡張薬がある。最近では、遺伝子ドーピングの小人症治療に使う成長ホルモン(GH)、血液ドーピングで、EPO(血液中の赤血球を増やすホルモンであるエリスポイエチン)がある。このような摂取したドーピングを体外に出すための利尿薬なども使われてきた。

4章・ドーピングの効果と副作用。

ドーピングの効果として、緊張を和らげる、筋力増大、持久力の向上、身体能力の向上、心機能の向上がある。しかし副作用で、総合失調症(幻覚・妄想)、心筋梗塞、脳梗塞、動脈硬化、インポテンツ、引退後の女性化が起こりうる可能性があり、とても危険である。

5章・ツール・ド・フランスの歴史。

ツール・ド・フランスの歴史はとても長く1903年に始まった。2度にわたる世界大戦中の中止(計11年間)を除き毎年開かれ、今年で第96回目になる。当初は耐久レースとして争われていたが、自転車製造技術の進歩や舗装路の普及もあり、スピードを競うスポーツへと変わっていく。ツール・ド・フランスは、毎年7月にフランスおよび周辺国を舞台にして行われる自転車プロロードレースである。

6章・ツール・ド・フランスとドーピングについて。

1998年の、ツール・ド・フランスにジャンダルマリ(国家警察)が介入し逮捕者8人を出した。2006年にはオペランオン・プエルト(2006年にスペイン国家警察が行ったドーピング摘発作戦のコード

ネーム)の余波を受けてヤン・ウルリッヒ(ドイツ選手)やイヴァン・バツソ(イタリア選手)、アレクサンドル・ヴィノクロフ(カザフスタン選手)などの優勝候補が軒並み出場停止となった。また総合優勝したフロイド・ランディス(アメリカ選手)も後にドーピング違反により、タイトルを剥奪された。

7章・まとめと考察。

過去に多くのドーピングが生まれスポーツマンシップに相反する行為が行われてきたが、早くか

らツール・ド・フランスではドーピング検査を導入し取り組んだ。しかし相反するかのように数々のドーピングが発覚し、生まれてきた。そんな中、歴代の優勝回数で1番多い優勝回数をもつランス・アームストロングがドーピング検査に1度も引っかかったことがないことは、スポーツマンらしい素晴らしいことだ。このような選手が増え、いつかこの世の中からドーピングが無くなっていくことを私は心から願っている。